

サツマイモ新系統‘関東132号’の佐賀県上場地域における適応性

○浦田貴子・石橋哲也・大坪竜太・檜崎耕輔¹⁾

(佐賀上場営農セ・¹⁾ 吉田農園)

【目的】

佐賀県北西部の畑作地帯である上場地域は県内最大のサツマイモ産地である。しかし農家の高齢化に伴う労働力不足等により年々作付面積が減少している。現在の主要品種は‘べにまさり’であるが、市場や栽培者からは多収でおいしい品種が求められており、新品種が続々と登場している。

そこでサツマイモの生産拡大をはかるため、新たに14系統について優良系統・品種の選定試験を実施した。その中で、‘関東132号’が上場地域での栽培に特に適していることを明らかにした。

【材料および方法】

(場内試験)

2009年から2013年までの5カ年、佐賀県上場営農センター(唐津市鎮西町)で実施した。

‘関東132号’の他に対照品種として‘高系14号’と‘べにまさり’を用いた。

定植は2009年5月15日、2010年5月17日、2011年5月18日、2012年5月17日、2013年5月15日に実施した。

施肥はサツマイモ専用肥料(BB450)を元肥としてN:P₂O₅:K₂O=0.5:1.9:2.5(kg/a)施用し、黒マルチ被覆後に挿苗した。

試験規模は1区8.5m²(1.7×5.0m)の3反復、栽植密度は畦幅0.85m、株間0.3mとした。

収穫は2009年および2010年は9月14日、2011年9月15日、2012年9月18日、2013年9月12日に実施した。

(現地試験)

2012年および2013年に唐津市鎮西町内農家の3圃場で実施した。供試系統・品種は場内試験と同一で、‘関東132号’の他に対照品種として‘高系14号’と‘べにまさり’を用いた。施肥は各農家の慣行とした。定植は5月中下旬、収穫は9月中旬～10月中旬に実施した。

【結果および考察】

(場内試験)

‘関東132号’は‘べにまさり’および‘高系14号’よりも上いも重が3割、上いも数が5割も多収である(表1)。

‘関東132号’の外観は‘べにまさり’および

‘高系14号’より条溝が浅く、皮が滑らかで外観に優れている。蒸しいもの肉質はやや粘質で繊維はやや少ない(表2)。

食味評価では回答者のうち‘関東132号’が‘べにまさり’よりもややおいしい～おいしいと回答した割合が67%、‘高系14号’に対しては78%と高かった(図1)。

(現地試験)

現地3圃場での試験で‘関東132号’は‘高系14号’および‘べにまさり’よりも3～4割収量が多かった(データ省略)。

以上の結果からサツマイモ‘関東132号’は‘べにまさり’および‘高系14号’よりも上いも数が多く多収である。また良食味で肉質はやや粘質であり、外観も優れ有望である。

なお、‘関東132号’は農研機構 作物研究所において育成された系統であり、現在品種登録出願中である。

表1 ‘関東132号’の収量における対象品種との比較

	試験系統 (対照品種)	収量・個数 (kg/a、個/a)	比較品種との 収量差	収量差の 95%信頼区間
上いも重	関東132号	352	-	-
	(べにまさり)	271	68	55 ~ 82
	(高系14号)	247	92	70 ~ 115
上いも数	関東132号	1,782	-	-
	(べにまさり)	1,153	681	324 ~ 1,038
	(高系14号)	1,203	613	404 ~ 821

※DerSimonian-Laird method(変量効果モデル)を用いたメタアナリシスにより5カ年の試験における各品種のa当たり上いも重および上いも数を評価した。

表2 外観および食感

品種名	塊根					蒸しいもの		
	形状	皮色	肉色	条溝	裂開	外観	肉質	繊維
関東132号	紡錘	赤紅	淡黄	浅	小	やや上	やや粘	やや少
べにまさり	短紡錘	赤紫	淡黄	中	小	中	やや粘	やや少
高系14号	紡錘	赤紅	淡黄	中	無	中	中	中

※蒸しいもの肉質および繊維については上場営農センター職員(約20名)の試食により判定。

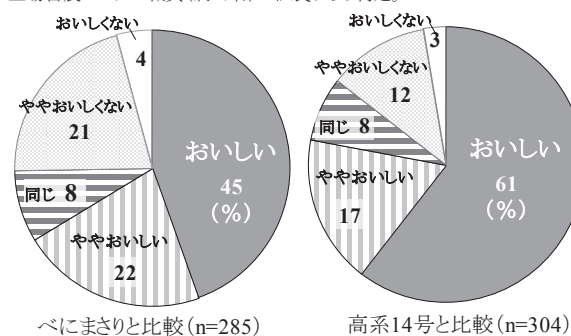


図1 関東132号に対する食味評価

※調査期間は2013年10月25日～11月24日

※調査対象は上場営農センター職員および来所者、鎮西町産業祭り来場者(10歳未満～80歳代)